ファインダーを覗く、そのうしろ姿を覗く。

目の前の一瞬のために、ファインダーを覗き続けてきた、まちの写真屋さん。
今、あなたの眼に映っているのは、どんな風景、どんな人の営みですか。
あの日が訪れるその前とその後、残す営みのこれまでとこれから。
これは、記録の裏側の記録——。

ランドスケープ｜**1.**風景　**2.**風景写真　**3.**横向きの
ポートレイト｜**1.**肖像　**2.**肖像写真　**3.**縦向きの

ランドスケープ｜ポートレイト
まちの写真屋の写真論

VOL.01　光陽写真（岩手県釜石市）

「私が一番いいのにしてね」ってよく言われるんだ。

光陽写真の店主、菊池賢一さんにはじめてお会いしたのは、2017年の8月。津波に流された家と仕事場の再建をめざし、仮設の商店街で営業を続けられていた。1時間の取材時間のあいだに、遺影の仕上げ、家族アルバムの受け渡し、工事現場の写真の出力など、人の暮らしにまつわるさまざまな局面に、写真を介して触れられていた。「（震災から7年が経とうとしている）今の自分の状況を何かに残しておきたいなあ」。ふと、呟かれた。記録に残す人々の営みを、記録に残したいと思った。誰もが写真を撮ることができるようになった現在、残すことのこれまでとこれからを、あらためて考えてみようと思った。2018年2月に行った本インタビューは、前回と同じく、仮設商店街の光陽写真内で実施した。お母さんの満子さんにもご同席いただいた。

——写真館はいつごろから始められたんですか。

賢一　ライト写真館という屋号で、大正生まれのお祖父ちゃんが釜石で始めたんだ。いつ始めたのか、どんな経緯で始めたのか、はっきりとしたことは知らない。腕は良かったらしい。呑んべえだったっていう話もよく聞いたけど。

満子　お義父さんは小さい頃から絵が上手で、仙台にあった絵の学校に入ったらしいの。でも周囲からは「食べていくのに、絵なんて無理だ」って言われて。絵の技術を学んで、鉛筆で描くような遺影を描いたり、軍人さんから掛け軸を頼まれて肖像画を描いてたらしい。昔の絵描きは写真館のようなこともやってたから。

戦時中は仙台の軍隊で、写真の仕事をやってたみたい。写真班みたいな立場だったのかな。各戸の仏壇に写真をあげてたらしい。お義父さんあんまり話さなかったから、詳しくは私も聞いてないけど。仙台が空襲に遭った時に、お義母さんは爆弾に直撃して亡くなった。お義父さんは釜石に戻ってきて、戦後、ライト写真館を始めた。しばらくして、また仙台で写真館を始めて、ケンが生まれてすぐに亡くなった。

賢一　お祖父ちゃんは仙台と釜石を行ったり来たりしてたんだね。お祖父ちゃんの記憶は全くないけれど、体中をなめられまくったっていう話は聞いたことがある。生まれてすぐに、仙台のお祖父ちゃんのところに行ったらしいの。すごく喜んだみたいで、お風呂からあげてもらった後にベロベロなめられたみたい。

満子　そんな時にお客さんが来たの。証明写真が欲しいって。そしたら「うちはそんな小さいの焼かねえ。畳1枚分ぐらいに伸ばすんだったらやってやる」って追い返しちゃった。みんなびっくりして、主人も「お客さんになんであんな言い方するんだ」ってお義父さんを質したら「後でまた来るから」って。そしたら本当に後で来た。

賢一　僕のお父さん（先代）は小さい頃からライト写真館でお祖父ちゃんの手伝いをしてた。中学生の頃からお祖父ちゃんの代わりに集合写真を撮りに行ったり。その頃はガラス乾板の時代だね。写真に囲まれて育ってきたわけだから、腕はよかったと思う。盛岡の写真館にもカメラマンとして呼ばれて働いていたこともあった。でも先代は、ライト写真館を継いだわけじゃなくて、あらたに光陽写真という写真館を始めたわけ。年配の人からはいまだに「よう、ライトさん！」って声かけられるけどね。

——光陽写真は、いつから始められたんですか。

賢一　昭和43年。僕が生まれたのが昭和45年3月だから、僕が生まれる2年前。先代は色にも厳しくてね。お店を始めた頃は、釜石市内にフジフィルムの現像所があって。お客さんが焼き増ししたい写真を持ってくると、現像所ですぐ焼いてもらって、それをさらに加工してた。でも、ちょっとでも焼きが悪かったら電話して「やり直し」ってひと言だけ言ってガチャンと切ってた。

満子　ふだんは優しいのよ。でも確かに仕事面では厳しかった。他の写真屋さんは、出来上がって来た写真をそのまま出すことが多いらしいんだけど。ウチは違ってて。もし色が良かったとしても、斑点とか気泡が少しでもできてたりすると全部スポット修正する。鉛筆をめながら、ネガに直接書き込んでいたね。

賢一　面相筆みたいな細い筆でもやってたね。家が仕事場だったから、そういうのはよく見ていた。乾燥機でパリパリになった写真がいっぱいでてきたり、水洗いしている写真がズラリと並んでいたり。それをまたいでよく怒られた。

フィルムの時代って画が反転してるネガが主流でしょ。店によって色の出し方が違うから他店と差がつきやすい。だからっ、あそこに持っていけば綺麗に出してくれる、とか、ここは安い、とか、差別化があったんだと思う。今はデジタルで合成したりするけど、当時は暗室でしてたの。先代が仕上げた肖像写真は見ればわかるね。額装された写真のウラにも、ちゃんと光陽写真ってサインしてある。

——菊池さんは、いつ、先代からこのお店を継がれたんですか。

賢一　僕は子どもの頃から、好きなことをやれって言われていて。だから、小さい頃に写真屋を手伝ったことがない。僕、釜石に帰るまでは、臨時で学校の先生をやってた。でも、長男だし、家業を継がないといけないのかなっていうのは頭のどっかにあって。とはいえ、正直なところ、先生やっての時は具体的には考えてなかった。

2000年頃から、携帯電話に写真機能が付き始めた頃に、先代から言われたんだ。「もし家に戻るつもりだったら、デジタル対応の設備を導入しようと思っている」って。ちょうどフィルムからデジタルへの過渡期だった。それがきっかけで、フィルムは先代がやって、僕はデジタルを分担してやり始めた。プリンタも自家処理するミニラボも店に置いた。それから何ちゃも、釜石に帰ってから、一から勉強した。色調整してプリントを焼くでしょ。先代がそれを見て「これ、ちょっと青いな。これはちょっと赤いな。やり直し。やり直し」。最後には、どうすればいいかわからない状態になって、動けなくなるくらい。「お母ちゃんの方がプリント上手いなあ」ってよく言われながら、修行した。

フィルムの場合は、ネガだから写ったものがすぐに見れない。撮った人か写った人がそこで見たものを頭の中で再生する、記憶をたどる。「ちょっと記憶と違う」とか「そうそう、こんなんだった」とかの感覚が色味に表れてくるんだ。その色味のイメージを掴んで補正できると、お客さんは「きれいだ」って言ってくれる。

満子　他の店で一度現像した写真を焼き増ししに来るお客さんがいるの。そういうの、とても嬉しいの。持って来た写真よりも絶対にきれいにあげてやるって思うもん。全然違うものにしてあげる。「え、なんでこんなに違うの」ってよく言われるのよ。

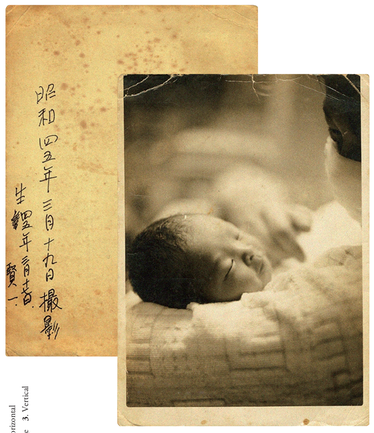
賢一　逆に今はデジタルの時代だから、お客さんがすぐにカメラのモニタやパソコンで見れる。モニタの色と違う、とかそういう反応が多くなってきた。今でこそ、個人でもPhotoshopとかを使って補正したりするけど、写真の良さというか、人の記憶とか感性があんまり活かされていないなあと思うこともある。写真に対する感覚や知識は、遺影を鉛筆で描いてた頃から今まで、連綿と受け継がれてきてるんだと思う。その積み重ねがあるから、この写真屋の今がある。

——これまでにご自身が撮影された、あるいは、ご自身が写っている写真の中で、強く印象に残っているものを教えてください。

満子　お義父さんが、生まれてすぐの主人を撮った写真があったんです。木のたらいの中で産湯に浸かっている写真。他にも、主人が子どもの頃に写真館で写した写真。

賢一　思い出の写真は全部津波に流されたけど、たまたま数枚だけ小さい頃の自分の写真がデータで残ってるのがある。2011年3月にスキャンして、ブログにあげた写真だけどね。（作業用のパソコンの画面を指差しながら）この写真なんて、地震の前日の10日に更新してる。僕の小さい頃の写真は、これだけしか手元に残ってない。これは、最初の店の前で写ってる写真。

満子　そうそう。最初は、この店で始めたの。開店した日のことは今でも忘れられない。開店したその日、知り合いやご近所さんを呼んでお祝いをやってたんです。そしたら商店街のお向かいさんが火事にたった。みんなで乾杯やってる時に、すぐ目の前が燃えて。それはもうすごかったです。お祝いの席に消防団の人たちもいたの。みんな行かなきゃってことになって、大騒ぎだった。



賢一　二代目のお店も写ってる。

満子　流されたお店。只越商店街に下駄屋さんがあったんだけど、そこを買って、移ったのよね。

これは生まれたてのケンを病室の窓ガラス越しに撮ってる写真。“昭和45年3月19日”の字は、私のだね、たぶん。ケンが病院で生まれたその日から、主人はずっと撮ってたね。

賢一　この水面すれすれの写真は、震災後に撮ったもの。子どもの頃から海が身近だったから、おのずと海岸に行って撮ってる。海に入ると気持ちが安らぐというか、嫌なことが全部海に溶けていく感覚があって。海にカメラを漬けて撮る欲求が気持ちのどこかにあったんだろうな。

これは、店を始めた昭和40年代頃の父が作業場で写っている写真だと思う。地震のあとに、店の跡地で見つけて拾ってきた。

あの日の14時46分は、ちょうど海にいて撮影してた。子どもの頃に港で先代に撮ってもらった写真があって。よく港のほうに散歩に連れてってくれたらしい。その写真を撮ったカメラが家にあったから、そのカメラで同じ場所を撮ったらどんな感じかなって思いながら行ったんだ。そしたら、揺れ出して。家に帰ったらもうめちゃくちゃになってて、それで逃げて、次の日家に戻ってきたらもう店はなかったっていう状態だった。ぐらぐら揺れてる最中の写真もあるよ。

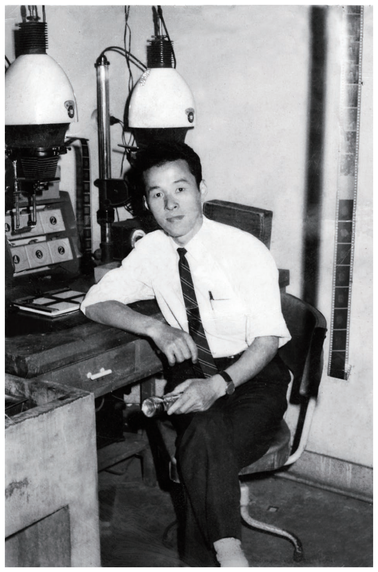
——今、記録に残したい風景や人物はありますか。

賢一　写真って、うれしい時に撮りたくなるんだよね。お祝いだったり、何かあった時に写真を撮りたいんだと思う。それを考えると、まだ自分は撮れないな。店が建ったりとか、家が新しくできたりとか、そういうことがあったら撮りたいと思う。その瞬間を残したい。

写真って、「過去」を残すためのものというイメージが強いけど、実はそうじゃないと思うんだ。撮ることはその瞬間にしかできない「現在」の行為だと思う。時間が経つからその瞬間が過去になってしまうけど、過去のものを撮ろうと思って撮ろうとしているわけじゃない。おばちゃんたちを撮る時、「若く写して」「すぐに写して」「私が一番いいのにしてね」ってよく言われるんだ。記念写真を撮る時は、数年後その写真がどんなふうに見られるんだろうって考えながら撮影してる。

写真はだから、現在から未来に向けた贈り物のようなものだと思うんだよね。今を記録に残すっていうことよりも、夢に近いようなもの、未来に伝えるものだと思う。そういうことを考えながら、写真を撮ってる。

2018.2.1



Landscapes | Portraits
Interviews with Local Studio Photographers in *Tohoku*
VOL.01 KOYO photography (*Kamaishi, Iwate* Prefecture)

—— *"I photograph, I become photograph."*

Studio photographers have been looking into a viewfinder for 'the moment' in front of them.
How landscapes and portraits reflect in their eyes?
They talk about the past, present and future of photographs.
And they took pictures themselves, and interior spaces of their studios.
This is a series of the records behind records.

Landscape | **1.** Scenery　**2.** Picture of scenery　**3.** Horizontal
Portrait | **1.** Person image　**2.** Picture of person image　**3.** Vertical

Landscapes

Portraits

〈表紙の写真について〉
インタビュー終了後、下記を依頼し、後日撮影いただいたものを掲載した。
・「写真館の自画像」を記録に残してください。
・「写真館のある風景」を記録に残してください。

ランドスケープ｜ポートレイト —— まちの写真屋の写真論
VOL.01 光陽写真（岩手県釜石市）

2018年3月1日発行

［企画］AHA!［Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ］

［取材・編集・執筆］松本翼（AHA!）
［デザイン］陽中俊介（Calamari Inc.）
［写真］菊池賢一（光陽写真）
［発行］アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

AHA!［Archive for Human Activities /人類の営みのためのアーカイブ］
市井の人々の記録の領域に着目するアーカイブ・プロジェクト。映像を個人を繋ぐ「ケア」の実践・研究するNPO法人記録と表現とメディアのための組織（remo）の事業の1つとして、2005年に大阪において始動。

＊本誌は、Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）「ランドスケープ／ポートレイト——まちの写真屋の写真論」（三笠書）特定非営利活動法人いわて連携復興センター、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）／［企画・制作］特定非営利活動法人記録と表現とメディアのための組織（remo）／［協力］NPO法人ゆりすネ /NINOサポートセンターの一環として制作されました。

©2018　アーツカウンシル東京　remo　光陽写真